

# うるほひ

園丁が日々<sup>に</sup>忘れてならぬ任務の一つは、其の花園にうるほひをたやさぬことである。彼れは朝夕に如露を携へて水そ<sup>く</sup>。見よ、其の如露の口からそ<sup>く</sup>がる、細い柔い霧の雨を。あえぐ様に疲れて居る花も、萎える様にうなだれてゐる葉も、今はそのうるほひに蘇つて、色もつや<sup>か</sup>に、活き<sup>く</sup>とした面を擧げる。園丁は斯うして、一つの花をも枯れさせまいとする。そのうるほひの恵に漏れさせまいとする。その爲には如露の底を傾けて、一滴の水をも残りなく與へ盡そうとする。實に花園のうるほひは、園丁の最も苦心する大きな責任の一つなのである。

けれども、園丁の如露は如何にも淺く、如何にも小さい。彼れは其の如露を充たす爲に、屢々貯

水池へ歸らねばならない。そうして、そこからうるほひの資を汲まなければならぬ。そうしなれば小さい如露が直ぐに虚になるのである。自分自身が直き涸れて仕舞ふのである。斯くて園丁は、先づ自らにうるほひのたえぬことを苦心する。往いては汲み、往いては汲み、實に斷え間なく汲むことを怠らない。

草花と同じく、斷えずうるほひを要求して居るものは幼兒である。しかも、如露よりも淺く小さく、直き涸れ易いものは吾々の心である。斷えずうるほひの與へ手とならなければならぬ。吾々は、又斷えずうるほひの汲み手でなければならぬ。——吾々の最も大切な修養の一つが此點にある。(倉橋惣三)